

1 山口八幡社

延喜式に記載される山田郡の19座内の「小口神社」が山口八幡社であると考えられています。山口八幡社の境内地には、古墳時代の横穴式石室等(山口八幡1〜3号墳)もみられ、古くから聖地と考えられていた場所に神社が営まれたものと考えられます。社伝では、承久2(1220)年に山田次郎重忠が当地へ八幡宮を勧進し、山口八幡社社殿を造営、山口神社を合祀したとされます。山口八幡社には、瀬戸市に残る最古の石造鳥居(延宝5(1677)年造)と、2番目に古い石燈籠(延宝7(1679)年造)があり、ともに市指定文化財となっています。



2 山口郷土資料館

山口の文化・文化財を後世に残し、未来に向けて皆で学び楽しむ場所として、平成8(1996)年に山口自治連区により設立されました。古墳や窯跡の出土品を「やまぐちのあゆみ」のコーナーで陳列し、山口の歴史を紹介しています。さらに史跡・名所・歳時記・農家の暮らし・四季折々の草花昆虫鳥などテーマごとに展示しています。2階正面には「山口の警固祭り」の等身大の模型や道具類を展示、映像コーナーでも祭りの様子を紹介しています。

開館時間 午前10時〜午後4時
休館日 土・日曜日・祝日
入館料 無料

Check 山口の警固祭り(市指定文化財)

警固祭りは、江戸時代に近隣の菱野村・本地村等とともに三河国境の猿投神社祭礼の際に飾り馬を奉納したのが始まりです。山口は九本の銀鷹の矢を「標具」とし、飾り馬を鉄砲隊や棒の手隊などが警固して奉納します。瀬戸市の無形民俗文化財に指定されています。また、明治時代に山口八幡社が郷社の格となって以降、山口八幡社に周辺の6ヶ村が献馬する「郷社祭り」も行われるようになり、今日まで大きな慶事の際に行われています。

Check 山口の昔はなし「9本の矢 標具の由来」

武田信玄の家臣山田信濃守が猿投山山裾にさしかかったところ、愛馬が山頂まで駆け上ってしまいました。そこに金色の鱗の大蛇が現れ、毒を吐きながら信濃守に襲いかかりました。信濃守が背負っていた銀鷹の矢10本の内1本を大蛇に放ったところ、見事矢に仕留められた大蛇は谷へ落ちていきました。しかし信濃守も毒気に侵され、山を下ったところで落馬して気を失ってしまいました。それを見つけた山口の村人が介抱しますが、しまいにはこの地で亡くなってしまいます。現在、山口では信濃守が背負っていた9本の銀鷹の矢を標具としています。



~せとものルーツと里山の歴史~ 山口ってどんなところ?

山口は瀬戸市の南部にあり、川と里山に囲まれた田園風景が広がっています。平城京出土土木簡に「山口郷」の地名がみられるなど、奈良時代にはすでに「山口」の名が使われていたことが伺われます。

この山口を東西に横断する矢田川周辺に広がる沖積地には、広い範囲に遺跡が広がっていることが知られています。中でも広大な面積をもつ若宮遺跡や吉野遺跡は、これまでに数回発掘調査が行われ、縄文・弥生・古墳・古代・中世といった各時代の生活の痕跡が確認されています。古墳時代には、集落周辺の丘陵上に塚原古墳群などが築かれるなど、この地を治める勢力が存在していたことを物語っています。また、山口の南部の丘陵内には市内最古の平安時代の窯跡があり、1000年以上のやきものの歴史を誇る瀬戸市において、その先駆的な地域であったことでも知られています。



吉野遺跡から出土した縄文土器
※愛知県埋蔵文化財センター提供



塚原1号墳(移築復元)

せとものルーツ

せともの始まりには諸説ありますが、現在の瀬戸市域で最初に操業された窯は、^{ひろくて}広久手第30号窯を始めとする山口南部丘陵の広久手古窯跡群です。灰釉陶器は、国内では初めて植物の灰を原料とした釉薬を器表面に施したもので、平安時代の9世紀以降、古代猿投窯などで生産が本格化します。瀬戸では、^{かいしよ}10世紀中頃になって初めてこの山口で窯が築かれ、様々な灰釉陶器が生産されました。現在も、海上の森の中には、当時の窯跡が数多く残されていますが、瀬戸窯で灰釉陶器の窯が集中してみられるのはこの山口だけの特徴です。



灰釉陶器



山口見どころ 勘どころ

江戸時代から続く「山口の警固祭り」や山口の歴史・自然を展示する山口郷土資料館、郷社として周辺地域の信仰を集める山口八幡社、鎌倉時代の氏族山田氏にゆかりの本泉寺、宮地古墳群などの歴史遺産を巡る旅は、「せともの」だけではない、瀬戸の魅力を知ることができます。また、あいち海上の森センターでは、里山散策の中で広久手第30号窯跡などの歴史遺産を訪れることができ、里山の歴史とせとものルーツを知ることができます。